

飢肥における重要伝統的建造物群保存地区の現状と問題

千 歳 壽 一*

1 伝統的建造物保存地区の調査に当たって

近年各方面で環境保全、省エネルギー、省廃棄物社会への施策の必要性が論じられ、実施可能な部分から実行され始めている。環境の悪化や精神の荒廃を無視したなりふりかまわぬ景気対策が求められる一方で、物から心へ社会的選好が推移しつつあることがアンケートなどで示されている。

目を地域に転じると、工業化による地域開発でなく観光・文化などによる地域おこしが、公害の虞れや膨大な投資の失敗という危険の少ない事業として、本格的に取り上げられている。伝統の尊重が求められ、城下町などの保存の重要性が各地で提唱され、具体化されている。

城下町を初めとする歴史的町並みを保存することは、第一に、住民にとって大きな精神的価値を持たせることになる。また第二に、丹精こめて保存された町並みはそれを見た外部の人の心に多大な感動を与える（大河直躬

歴史的遺産の保存・活用とまちづくり p. 30）。それだけでなく、歴史的遺産の活用再生の直接的効果は、建物の保存経費の軽減につながり、必要な建物の新設に要するエネルギー・削減になるのである（大河直躬 前出 p. 41, 42）。

いくつかの自治体は、地域振興や定住の基となる精神的安定を目指して、住民の精神的統合のシンボルとしての伝統的建造物の保存や伝統的建造物群保存地区選定による事業に力を入れている。

一方、伝統的建造物群維持の問題点も見過しえない状態になっている。景気低迷による一般的な支出の抑制傾向、住民の高齢化や行政の経費削減などによって伝統的建造物の保存の困難性が増している。

立正大学地球環境科学部地理学科は、平成13年度3年生のフィールドワークの地域の一つとして、宮崎県日南市の飢肥地区を選んだ。飢肥地区には伝統的建造物群保存地区が指定されて、武家屋敷を主体とした町並みの保存が行なわれ、整然とした城下町のたたずまいを残して

いる。しかしここにも、上述のような問題が起こりつつある。日南市の飢肥まちなみ研究会は、平成8年に住民アンケート調査を行ない対応策を進めている。それ以来5年経た今回、資料調査や観察調査を行うとともに、前回と同じ設問でアンケート調査を行ない、前回との比較を通して施策の効果や住民の変容の把握を試みた。本報告は、これらの学生達の調査結果を、指導教員である筆者が取りまとめたものである。学生が短期間行なった小規模なアンケートゆえ、結果を単純に比較するには問題がある。それを承知しながら、今回の調査からえた情報を少しでも対策に生かせることを願い、現地での有識者から聴取した意見や学生達の提言・視察感想などと合せて報告することにした。

2 伝統的建造物群保存地区とは

まず本章で、伝統的建造物群保存地区について、中村賢二郎の「文化財保護制度」と、荻谷勇雅の論文「歴史的建造物等の保存制度の動向と歴史を活かしたまちづくりについて」を参考に、概要を述べることにする。

(1) 伝統的建造物群保存地区制度の発足

建造物、城跡、庭園などのうち文化的に重要な歴史的遺産は、かねてから文化財保護法による保護が行なわれていた。また、奈良、飛鳥等古都は、「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」によって守られてきた。指定された建造物などは、規制や経済的支援によって確実に整備保存されてきた。しかし保存を重視するあまり規制が厳重で、城跡や寺院などを除いて日常生活を営む民家を指定するには問題が多かった。また個々の建物を対象にするもので、地域としての景観については、古都以外、考慮されなかった。

地域として伝統的建造物を利用しながら保存することへの要望が高まり、いくつかの自治体で保存のための条例が制定されるなかで、1975年文化財保護法が改正され、

*立正大学地球環境科学部

伝統的建造物群保存地区制度が発足した。

図1 宮崎県日南市

(2) 指定と選定

伝統的建造物群保存地区の制度は、文化財保護法にいう「周囲の環境と一体をなし、歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値の高いもの」を市町村が周辺の環境ともども伝統的建造物群保存地区として、都市計画か市町村独自の保存条例で決定し、建造物に対して規制や補助を行うものである。国はそのうちとくに価値の高いものを、重要伝統的建造物群保存地区として選定して補助する。

(3) 規制

指定を受けると、建造物、工作物、土地等の変更には市町村の許可が必要になる。

しかし規制は重要文化財と異なり、建物の内部には及ばず、外観のみの規制に留まる。しかも、現実の居住者の生活や事業者の生産活動が行えるように、ある程度の変更は認められている。現状をそのまま凍結的に保存するのではなく、修景と称して、地区の景観や環境に相応しい改善維持に資するような現状変更は推進される。

(4) 保存事業

保存事業は保存計画を定めて行われる。保存すべき建物を決めるほか、防災施設や公共施設などの管理計画などを定める。保存計画に従って、修理や修景が進められる。

(5) 選定状況

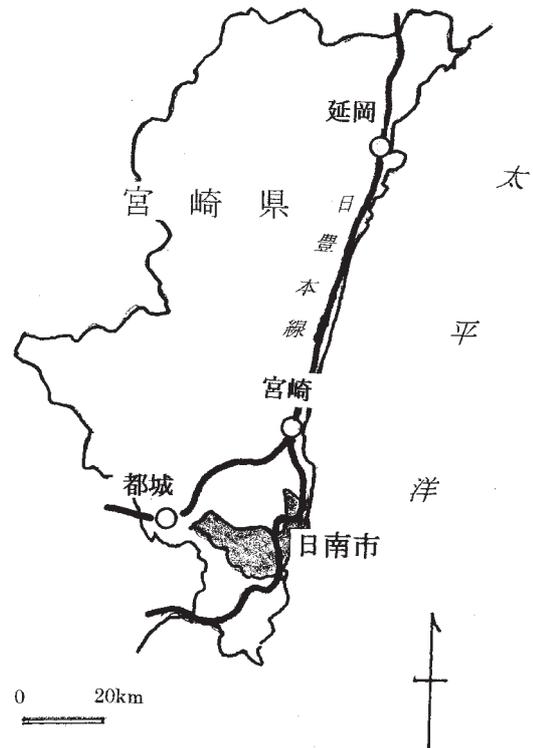
平成11年5月現在、武家町10、商家町などその他の町36、農村7、計53地区が重要伝統的建造物群保存地区として選定されている。

武家町として飫肥、萩など、商家町として佐原、高山などである。

3 日南市・飫肥地区の概要

(1) 自然環境

日南市は宮崎県南部に位置し、北は宮崎市の南に接し、東側は日南海岸で太平洋に面し、西側は第三紀層の山地で都城市や串間市に続いている。そして、その丘陵地の間を流れる広渡川と酒谷川による沖積平野が、油津・中央など市の中心軸となる地域の基盤を形成しており、酒谷川の中流の屈曲に囲まれるように飫肥城下町が静かな



たたずまいを見せている（図1）。

面積は294km²で、山林が55%と大半を占め、田畑が9%となっており、宅地は3%である。比較的晴天が多く温暖（平均18.4℃）である。一方、台風銀座といわれているように、台風の影響を強く受ける。温暖な気候を利用して、杉の植林が盛んである。

(2) 歴史

この地域の歴史は、12世紀、工藤氏が日向地頭に補任されたときに始まるとしてよいようである。その後いくつかの戦乱の後16世紀、豊臣秀吉の九州統一後、工藤氏の子孫伊東氏が飫肥藩主として確定し、5万1千石の飫肥藩として以後明治まで続く。

広大な山地と温暖な気候を利用し奨励した林業と豊かな水産資源で、飫肥藩の生活は安定していた。陸上交通は自然の難路により未発達であったため、海上交通が併用された。特産物の飫肥杉の積出港としての油津港が繁栄していた。そして、明治維新後は、港は油津町、城下は飫肥町となり、経済と政治の中心地となった。

昭和になると、1937年、吾田村に日本パルプ工業飫肥工場が創業し、近代的産業が進められることになった。そして第二次世界大戦後、1950年、飫肥町、油津町、吾田町、東郷村が合併して日南市が誕生した。その後1955年、細田町、鶴戸村が合併され、さらに1956年、酒谷村、

榎原村大窪地区が合併され、現在の地域になった。また1955年、日南海岸国定公園が指定され、観光地としての地歩を固め、1963年、国鉄日南線が全通することによって、九州における交通ネットワークの一端を形成するに至った。

(3) 産業・社会

日南市の人口は、2000年において45,958人を数える。就業者人口は、22,555人で、そのうち第一次産業12.5%、第二次産業28.5%、第三次産業59.0%である(1995年)。

日本パルプ工業飫肥工場は、1939年王子製紙が経営を引き継ぎ、1963年新王子製紙の改新工事が完了した。現在、新王子製紙は日南市の所得の約1割を担う産業となっている。

そのほか、みかんや、花卉栽培などが主な産業となっている。また戦前に全国1位であったまぐろ漁は、現在も続いている。

市の中央をほぼ北西から南東に向けて縦断する国道222号線に沿って、油津、中央(吾田)、飫肥が拠点的に並び、それらを中心に市街地が広がっている。

(4) 総合計画

21世紀に向けた総合的町づくりとして、2001年に第四次総合計画が策定された。

第一に、「活力ある元気なまちづくり」として、交通網・交通体系の整備、豊かな雇用環境の整備、市民活動の促進、歴史の香りの漂うまちづくりを挙げ、製紙を中心とした製造業、観光業、そのための工業団地の造成、東九州自動車道の建設促進を謳っている。第二「地域特性を生かした生きがいの持てるまちづくり」、第三「安全で快適なまちづくり」、第四「健康で安心できるまちづくり」、第五「郷土を愛する心豊かな人づくり」と続いている。その背景には高齢化と地方分権があり、海の幸などに代表される自然の恵みと歴史的遺産を生かすとともに、新たな雇用の場を誘致することによって、町おこしを図ろうとするのである。

4 飫肥重要伝統的建造物群保存地区の経緯

(1) 町おこしとしての保存運動

日南市の人口は1956年をピークとして流出に変わり、以後その傾向が続いていた。1974年、新しい市長は事業宣言を行い、市を挙げて町おこしに努力することとし、その一つとして飫肥城の復元事業を取上げた。

飫肥城復元促進協議会が発足し、募金活動を始めるなど、飫肥城復元事業が開始された。また、市議会は文化財保存都市宣言を採択した。さらに市は、町並み保存の先進自治体と「町並み保存に関する要望書」を国に提出した。

重要伝統的建造物群保存地区制度が発足すると、直ちに調査を実施し、飫肥城とその城下町を伝統的建造物群保存地区に指定し、国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受け、事業を強力に実行することになった。

一方、城下町の中央を横断する本町通は国道222号線であるため拡幅されることになり、それに伴い和風の商店街の保存的新築が進められることになった。当初、建設省は交通容量増強のためバイパス道路を計画していたが、交通量の減少による賑わいの低下や交通施設の不備による街の活力の衰えを危惧する地元の働きかけで、原道の拡幅が行われることに変更された。そのとき地元商店の関係者は一致団結して、伝統ある城下町に相応しい景観の商店街の形成に協力し、現在見られるような江戸時代を思わせる特徴的な商店街が建設された。

このほか、飫肥出身の外務大臣で日露戦争終結のためのポーツマス条約の締結で中心的な役割を演じた、小村寿太郎男爵(当時)の記念館を併設する国際交流センターが、城の大手門の近くに建設されている(図2)。

(2) 重要伝統的建造物群保存地区指定

1975年伝統的建造物群保存対策協議会が結成され、保存のための調査が熊本大学工学部に委託された。そして翌年日南市都市計画審議会において、伝統的建造物群保存地区に指定されることが決定された。またこれに合わせて市議会において、伝統的建造物群保存地区保存条例が議決された。

1977年「地方における小規模な城下町の典型的なものとして侍屋敷の歴史的風致をよくあらわし我が国にとってもその価値は高い」ことが認められ、九州における最初の国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。続いて伝統的建造物群保存対策事業第1次5ヶ年実施計画が市によって策定され、規制と事業が強化推進されることになった。

市を中心として保存事業が開始され、伊東伝左衛門家を初めとする数多くの家屋や石垣の保存修景が行われ、1996年までに総事業費約3億2千万円(市費29%、自己負担20%)の事業が行われた。さらに、電話線埋設、大手門通りと横馬場通りの電柱移設など関係機関も協力し、他の関連事業なども行われ、伝統的建造物群保存に相応

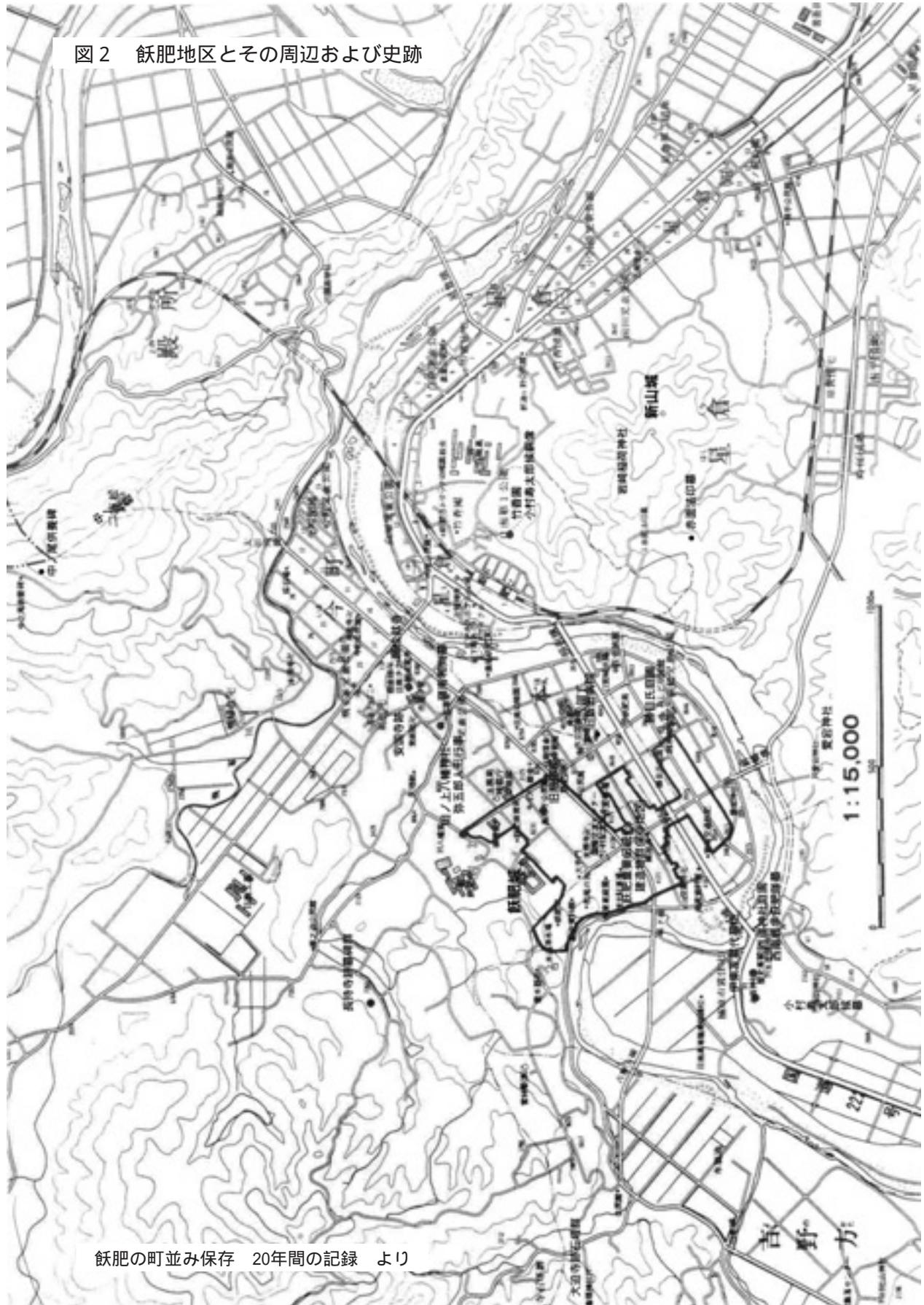


図3 飢肥重要伝統的建造物群保存地区と保存物件



飢肥の町並み保存 20年間の記録 より

しい町並みが維持保存されてきている（図3）。

しかし、指定後20年以上たち、住民の高齢化などによる町並み維持への影響などいくつかの問題が発生している。市当局にも住民にも、新たな対応が求められている時期に至っているのである（飫肥の町並み保存 20年間の記録，p. 4 - 9）。

5 飫肥重要伝統的建造物群保存地区におけるアンケート調査

(1) 現地調査の実施

2001年6月11から14日の間に、立正大学地球環境科学部地理学科3年の学生達が現地調査を実施した。地理学科のカリキュラムでは現地調査の実習が必修とされ、これによって現地調査の技術の習得や感覚の養成が図られるのである。

実習対象地域として、日南市飫肥の重要伝統的建造物群保存地区と商人街を選定し、資料調査、観察調査、アンケート調査を行った。アンケート調査を行う前に当該地区を観察調査し、市役所の説明を受け、飫肥在住の有識者の意見を聞くなど学習の機会をえておいた。

アンケート調査は、重要伝統的建造物群保存地区担当と商人街担当に分けて実施し、集計分析を行った。本論文では、全国的な制度として広範囲に実施されている重要伝統的建造物群保存地区に焦点を絞って報告する。

平成8年、市の飫肥まちなみ研究会によってアンケート調査が行われたときは、649件の回収をえて集計分析された。今回は、学生が短期間で行うアンケートであり、調査結果の精度保証には十分でない面がある。しかし、アンケート実施後5年を経て同じ設問で行うものであり、変化があれば、その片鱗をある程度捉えることが可能と考えられた。

(2) 重要伝統的建造物群保存地区アンケート調査実施

このアンケートの目的は、第一に現地調査の実習であり、第二に5年前のアンケートとの比較を行いその間の変化を調べ、問題があればそれを明らかにし、地域に新たな情報の提供を試みることである。現在一般に、地理学の研究は社会へ直接的貢献を目的として行われているわけではない。しかし、現実の社会に接することによって活性化し学術的な高度化が見られることも少なくない。社会的貢献という意義付けによって研究意欲が高められることもある。また社会に研究成果を還元することは研究者の社会的責務でもある。

本論文の対象地域は、飫肥の重要伝統的建造物群保存

地区全域とした。アンケート調査の方法は、学生2人1組で各家庭を訪問して質問し、聞き取った結果を調査票に記入する方法である。回答者数は、不在者が意外と多く、19名に止まった。調査項目は、8年前の飫肥まちなみ研究会のものと同様で、付属資料に示すとおりである。回答結果は、表1から表4に提示してある。なお、前回のデータのうち、伝建地区が主たる調査区域になっている十文字と大手二つの区域のデータ156件のみを比較の対象にした。

(3) アンケート調査の結果

回答者 問1，問2

今回は昼間の訪問調査のためか女性が6割で多かった。年齢も70代が5割を越え前回は3割上回る値となった。20代は皆無となり、30代は半減し、40代が3分の1に減少した。職業も無職が4割5分だったのが10ポイント増で5割5分に増加した。

家族構成は、夫婦のみが10ポイント以上増えて5割弱となった。夫婦と子供は10ポイント近く減少し、単身者は若干増加した。

高齢者の増加と子供の減少を表す数値と思われる。

居住歴・居住意向と住宅・敷地 問3～問8

戦前からの居住者が1割近く減り、戦後からの居住者がそれに代って比率が増えた。将来とも住み続ける意思のある人の割合が前回より1割近く増加した。伝統的建造物群保存などの施策でそうなったのかどうかは不明である。

敷地も住宅も約8割が自己所有である。

住宅の建設年代は戦後が7割で、修理の予定ありが10ポイント近く増え、1割5分を超え、予定はないが5割弱に減少した。

戦前からの住宅の良さについての回答が、前は広さや景観など分かれていたが、今回は住宅の広さであるという回答が5割を占めている。戦前からの住宅の問題点には、老朽化の他、今回は居住性の悪さの指摘も浮上してきた（表1，表2）。

伝統的建造物群保存地区 問9～問19

重要伝統的建造物群保存地区にかかる規制や与えられる助成を、前は知らない人が多少いたが今回は全部承知している。

保存地区に選定された後の景観の変化について、前は8割以上で今回も7割以上肯定的な意見が占め、肯定否定双方が少し減った分変わらないという意見が倍増している。将来の景観については、保存すべきろいう意見が、

表1 飼肥まちなみアンケート1

平成13年

選択肢	問1-1	問1-2	問1-3	問2	問3	問4	問5-1	問5-2	問6	問7(1)	問7(2)	問8(1)	問8(2)	問9
1	8	0	2	3	1	16	16	16	0	0	3	4	3	16
2	11	1	0	9	0	3	3	3	0	3	7	3	3	3
3		1	2	4	2	0			0	2	9	1	0	
4		4	1	1	8	0			2	1		0		
5		3	0	2	8					13				
6		10	1											
7			11											
8			3											
計	19	19	20	19	19	19	19	19	2	19	19	8	6	19

平成8年

1	66	3	23	21	7	114	119	115	1	2	8	18	22	90
2	72	17	17	52	4	29	32	31	1	12	35	18	9	54
3		26	7	43	29	5			4	9	80	15	4	
4		32	3	6	41	2			1	22		7		
5		31	0	25	73					98				
6		43	14											
7			62											
8			15											
計	138	152	141	147	154	150	151	146	7	143	123	58	35	144

表2 飼肥まちなみアンケート1 百分比

単位%

平成13年

選択肢	問1-1	問1-2	問1-3	問2	問3	問4	問5-1	問5-2	問6	問7(1)	問7(2)	問8(1)	問8(2)	問9
1	42.11	0.00	10.00	15.79	5.26	84.21	84.21	84.21	0.00	0.00	15.79	50.00	50.00	84.21
2	57.89	5.26	0.00	47.37	0.00	15.79	15.79	15.79	0.00	15.79	36.84	37.50	50.00	15.79
3		5.26	10.00	21.05	10.53	0.00			0.00	10.53	47.37	12.50	0.00	
4		21.05	5.00	5.26	42.11	0.00			100.00	5.26		0.00		
5		15.79	0.00	10.53	42.11					68.42				
6		52.63	5.00											
7			55.00											
8			15.00											
計	100.00	99.99	100.00	100.00	100.01	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

平成8年

1	47.83	1.97	16.31	14.29	4.55	76.00	78.81	78.77	14.29	1.40	6.50	31.03	62.86	62.50
2	52.17	11.18	12.06	35.37	2.60	19.33	21.19	21.23	14.29	8.39	28.46	31.03	25.71	37.50
3		17.11	4.96	29.25	18.83	3.33			57.14	6.29	65.04	25.86	11.43	
4		21.05	2.13	4.08	26.62	1.33			14.29	15.38		12.07		
5		20.39	0.00	17.01	47.40					68.53				
6		28.29	9.93											
7			43.97											
8			10.64											
計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

平成13 - 平成8

1	- 5.72	- 1.97	- 6.31	1.50	0.72	8.21	5.40	5.44	- 14.29	- 1.40	9.29	18.97	- 12.86	21.71
2	5.72	- 5.92	- 12.06	11.99	- 2.60	- 3.54	- 5.40	- 5.44	- 14.29	7.40	8.39	6.47	24.29	- 21.71
3		- 11.84	5.04	- 8.20	- 8.30	- 3.33			- 57.14	4.23	- 17.67	- 13.36	- 11.43	
4		0.00	2.87	1.18	15.48	- 1.33			85.71	- 10.12		- 12.07		
5		- 4.61	0.00	- 6.48	- 5.30					- 0.11				
6		24.34	- 4.93											
7			11.03											
8			4.36											
計	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

表3 飫肥まちなみアンケート2

平成13年

選択肢	問10	問11	問12	問15	問16(1)	問16(2)	問16(3)	問16(4)	問16(5)	問16(6)	問17	問18	問19	問20
1	16	16	7	16	2	2	3	8	1	2	15	1	0	7
2	0	0	7	1	17	17	16	11	18	17	2	5	0	2
3			0	3							1	1	0	2
4			0								1	11	1	4
5			5									0	1	5
6													0	0
7														3
8														1
9														1
10														2
11														4
12														12
13														5
14														4
15														2
16														7
17														1
計	16	16	19	20	19	19	19	19	19	19	19	18	2	62

平成8年

1	81	67	39	65	18	24	7	41	7	9	106	70	4	53
2	7	19	33	3	130	119	138	102	139	135	11	45	2	42
3			1	7							26	13	3	24
4			3								7	76	4	60
5			11									0	4	17
6													1	6
7														39
8														32
9														4
10														22
11														23
12														41
13														20
14														14
15														6
16														24
17														2
計	88	86	87	75	148	143	145	143	146	144	150	204	18	429

多少減少しその他という回答に変わっているが、前回と変わらず8割を越し景観を維持しようという意欲の旺盛さを感じさせられる。

保存地区選定後の飫肥の町について詳細な質問が行われた。行政サービスが保存地区に偏っていないかとの質問に対しては、保存地区居住者ゆえ当然かもしれないが、そのようなことはないとの否定が多い。また観光客の増加が町の落ち着きをなくしたという答は少なかった前回よりさらに減ったが、人情風俗の悪化を招いたりしていることはないという回答は8割に近いものの10ポイント減少している。市の財政が良くなり住みよい町づくりが進んだかという設問には、前回よりは肯定が10ポイント以上増えたが、それでも半数以上が否定している。商店の売り上げ増や雇用の増加については前回同様9割が否定の回答である。保存地区を観光地化することには賛成が7割から8割弱に増加し、その理由として、町に活気が

出るが30ポイント弱低下し、城下町の良さを見てもらえるが20ポイント以上増加している。経済的なメリットはないが、城下町を誇りに思う意識が強まっているように思われる。

行政に対する要望 問20

第1位は前回約10%で3位であった宿泊施設の整備で、今回10ポイント増加している。2位と3位は同率11%強で前回2位の道路交通施設の整備と今回6ポイント増加の家屋等の保存修理であり、後者の急浮上が目に付く。4位と5位も同率8%で、公民館・コミュニティハウス等の整備と商業の振興で、それぞれ前回から増加している。

設問のなかには、福祉などについて訊ねる項目もあるが、それらに対する要望は低い。東京のような大都市における行政への要望でつねに1, 2位を占める福祉に対する要求が少ないことが特に目についた。

表4 飼肥まちなみアンケート2 百分比

単位%

平成13年

選択肢	問10	問11	問12	問15	問16(1)	問16(2)	問16(3)	問16(4)	問16(5)	問16(6)	問17	問18	問19	問20
1	100.00	100.00	36.84	80.00	10.53	10.53	15.79	42.11	5.26	10.53	78.95	5.56	0.00	11.29
2	0.00	0.00	36.84	5.00	89.47	89.47	84.21	57.89	94.74	89.47	10.53	27.78	0.00	3.23
3			0.00	15.00							5.26	5.56	0.00	3.23
4			0.00								5.26	61.11	50.00	6.45
5			26.32									0.00	50.00	8.06
6													0.00	0.00
7														4.84
8														1.61
9														1.61
10														3.23
11														6.45
12														19.35
13														8.06
14														6.45
15														3.23
16														11.29
17														1.61
計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.01	100.00	99.99

平成8年

1	92.05	77.91	44.83	86.67	12.16	16.78	4.83	28.67	4.79	6.25	70.67	34.31	22.22	12.35
2	7.95	22.09	37.93	4.00	87.84	83.22	95.17	71.33	95.21	93.75	7.33	22.06	11.11	9.79
3			1.15	9.33							17.33	6.37	16.67	5.59
4			3.45								4.67	37.25	22.22	13.99
5			12.64									0.00	22.22	3.96
6													5.56	1.40
7														9.09
8														7.46
9														0.93
10														5.13
11														5.36
12														9.56
13														4.66
14														3.26
15														1.40
16														5.59
17														0.47
計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

平成13 - 平成8

1	7.95	22.09	- 7.99	- 6.67	- 1.64	- 6.26	10.96	13.43	0.47	4.28	8.28	- 28.76	- 22.22	- 1.06
2	- 7.95	- 22.09	- 1.09	1.00	1.64	6.26	- 10.96	- 13.43	- 0.47	- 4.28	3.19	5.72	- 11.11	- 6.56
3			- 1.15	5.67							- 12.07	- 0.82	- 16.67	- 2.37
4			- 3.45								0.60	23.86	27.78	- 7.53
5			13.67									0.00	27.78	4.10
6													- 5.56	- 1.40
7														- 4.25
8														- 5.85
9														0.68
10														- 1.90
11														1.09
12														9.80
13														3.40
14														3.19
15														1.83
16														5.70
17														1.15
計	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

まとめ

以上のアンケート結果から、全体として大きな変化は見出せなかったが、僅か5年ではそれ程顕著な変化が現れないのは当然とも考えられる。そのなかでも、飫肥の城下町に対する誇りと愛着がより強く表明されたということができそうである。一方、高齢化や建物の老朽化という経年変化の問題がさらに克明に浮き彫りにされた。

今回の調査から、維持保存の意識は衰えず、むしろ向上しているように見えるが、時間の推移による変化への対応を要する問題が顕在化しているといえることができる。

6 復元保存から発展的保存へ

今回の現地調査において、保存事業により城下町に相応しい景観が復元されたことは明らかであり、そのことは外部の者である学生達に大きな感銘を与えた。

アンケート調査から、住民の保存への意識の高揚を見取ることができた。一方、高齢化の事実は明白で、問題の顕在化が進行しつつあることもわかった。

復元・保存から維持に重点の移行の時期に至ったように思われる。行政の地域に根ざした積極的な対応の必要性がさらに高まっているといえそうである。学生の提言・感想にもあるように、これからの町との意識という意識をもち、駐車場の整備、トイレの設置などが必要であろう。街の食堂の主人との会話で、「自分達はこの町がそんな大切な城下町とは知らなかった。役所でそういうことを知らせてくれたら、観光客への対し方も考えるのに」というのを聞いた。

少子高齢化、景気低迷など前途の困難性は大きい。しかし、日本のアイデンティティを表すかけがえのない町

であり、守るに十分値する地域・空間である。

将来を見据えると、地球環境問題がますます厳しくなり、江戸時代の知恵なども必要といわれている。江戸時代をシンボライズする城下町の精神的重要性が一層高まることが予想される。城下町の発展的保存が求められているのである。

参考文献

- 大河直躬 1997.「歴史的遺産の保存・活用とまちづくり」学芸出版社.
飫肥まちなみ研究会 1996.「飫肥のまちなみ - 歴史的景観を生かしたまちづくり」
荻谷勇雅 1999. 歴史的建造物等の保存制度の動向と歴史を活かしたまちづくりについて. 住宅48巻5号. Pp.20 - 24.
中村賢二郎 1999.「文化財保護制度概説」ぎょうせい.
宮崎県日南市教育委員会 1998.「飫肥の町並み保存 20年間の記録」

謝 辞

今回の調査の実施に当たって、関係各方面の方々のお世話になりました。

日南市役所では、上村武昭収入役の広い視野に基づくご指導のもと、教育委員会社会教育課の岡本武憲課長補佐に、現地調査から有識者への連絡など万端のご助力をいただきました。事前の打ち合わせについては、日南市観光協会事務局の田中芳次長にお世話になりました。国際交流センター小村記念館では、宮浦直館長が丁寧に説明下さいました。

地元の有識者の方々、安藤英雄様、伊東正直様、梅村亨信様、松田利正様から、飫肥の保存と振興に関する数々の有益なお話を聞かせていただきました。

皆様に厚く御礼申し上げます。

付 属 資 料

アンケート番号（ ）

飢肥のまちなみアンケート

アンケート担当者 _____

調査地区 _____ ()

問1 あなた自身のことについてお知らせください。

1 - 1 性別 ()

1 男 2 女

1 - 2 年齢 ()

1 20代 2 30代 3 40代 4 50代 5 60代 6 70代以上

1 - 3 職業 ()

1 会社員 2 公務員 3 商店経営 4 農林業 5 労務従事 6 個人事業主 7 無職
8 その他

問2 家族構成及び家族数、現在の同居家族についてお知らせ下さい。 ()

1 単身 2 夫婦 3 夫婦と子供 4 2世帯夫婦 5 その他

問3 現在のところに住むようになった時期はいつごろですか。 ()

1 明治以前 2 明治時代 3 昭和20年以前 4 昭和21年～52年まで 5 昭和52年以降

問4 これからも現在のところにお住まいになりますか。 ()

1 住み続ける 2 当分は住む 3 近いうちに出る 4 1年以内に出る

問5 ご敷地と住宅の所有はどなたになっていますか。

5 - 1 敷地 ()

1 所有地 2 借地

5 - 2 住宅 ()

1 持ち家 2 借家

問6 持ち家で転居する予定の方にお尋ねします。転居後の住宅について ()

1 空き家のまま 2 売却する 3 貸家にする 4 その他

問7(1) 住宅について いつごろ建てられた物 ()

1 江戸時代 2 明治時代 3 大正時代 4 昭和元年～20年まで 5 昭和21年以降

問7(2) 住宅について 修理や工事の予定 ()

1 あるので近々やるつもり 2 あるが今すぐはやらない 3 ない

問8(1) 戦前の住宅に住んでいる方へ(複数回等可) 気に入っているところ

- 1 住宅の広さ ()
- 2 敷地の広さ ()
- 3 景観の良さ ()
- 4 その他 ()

問8(2) 戦前の住宅に住んでいる方へ(複数回等可) 不便なところ

- 1 建物の老朽化 ()
- 2 居住性の悪さ ()
- 3 その他 ()

問9 あなたの住んでいる場所はまちなみ保存地区ですか。 ()

- 1 はい 2 いいえ

《問10～15は保存地区の方に》

問10 保存地区内で住宅や車庫、門などを新築したり取り壊したりするときに、市の許可が必要であることを知っていますか。 ()

- 1 知っている 2 知らなかった

問11 保存地区内で住宅や車庫、門などを新築するとき形や地や材料などに規制を受ける反面、市の補助金が交付されることを知っていますか。 ()

- 1 知っている 2 知らなかった

問12 保存地区に選定されてからこの町の景観についてどう思いますか。 ()

- 1 かなり景観がよくなった 2 少し景観がよくなった 3 かなり景観が悪くなった
- 4 少し景観が悪くなった 5 変わらない

問15 将来の保存地区の景観はどうあってほしいですか。 ()

- 1 歴史的な景観の維持 2 景観を犠牲にして生活優先の建物を建てたい 3 その他

問16 国の「重要伝統的建造物群保存地区」の選定があって以来、飯肥のまちなみは次のような変化があったと思いますか。

(1) 町内に観光客が流入し、まち全体の落ち着きがなくなった。 ()

- 1 そう思う 2 そう思わない

(2) 行政サービスが「保存地区」など特定の住戸や地域に片寄せた。 ()

- 1 そう思う 2 そう思わない

(3) 人情や風俗が悪くなった。 ()

- 1 そう思う 2 そう思わない

(4) 市の財政が豊かになり、住みよいまちづくりが進みつつある。 ()

- 1 そう思う 2 そう思わない

(5) 商店がにぎわい、周辺地域からの買い物客がふえた。 ()

- 1 そう思う 2 そう思わない

- (6) 地元住民の働く場所がふえた。 ()
1 そう思う 2 そう思わない

- 問17 保存地区を観光資源として活用することについてどうお考えですか ()
1 賛成である 2 反対である 3 どちらでもよい 4 その他

- 問18 問17で「賛成である」と答えた方のその理由は何ですか。 ()
1 町に活気がでる 2 伝統的な景観の整備が進む 3 商売の利益があがる
4 城下町の良さを見てもらえる 5 その他

- 問19 問17で「反対である」と答えた方のその理由は何ですか。 ()
1 静かな環境が破壊される 2 無断で敷地内に立ち入られると困る
3 観光客相手の店などが建つと困る 4 観光客が来ても何の役にもならない
5 観光資源にすることが問題 6 その他

- 問20 飫肥城下町および周辺地区の町づくりと振興について今一番整備してほしい事業は何ですか (3つ選んで下さい)。 ()
1 道路、交通の整備 2 交通安全施設、防火施設 3 治山、治水施設、緑化対策
4 公園、遊園地、緑地の整備 5 公民館、コミュニティハウス等の整備
6 学校施設の整備充実 7 老人、身障者の福祉施設 8 保健、医療施設 9 農業、林業の振興
10 農産物加工品、土産品等の振興 11 観光レクリエーション施設の充実 12 民宿、宿泊施設の整備
13 商業の振興 14 工業及び地場産業の振興 15 歴史資料館、博物館整備 16 家屋等の保存修理
17 その他 ()
()
()

有識者意見 - 飢肥フィールドワーク 2001,6.12

今回の現地調査において、地元の保存活動のリーダーとして活躍しておられる安藤英雄氏、伊東正直氏、梅村亨信氏、松田利正氏からお話頂き、質問に答えて頂いた。いくつかの有益なお話を聞かせて頂いたが、ここでは、質疑についてのみ掲載する。

保存活動を推進してきた人達は、どのような世代で、どのような職業の人達でしょうか。

答 当初、保存活動は存在してなかったのですが、行政が主導してやるようになると、60歳以上の高齢者が中心になり、「この町を残していかなければならない」という意識をもつ様々な職業の人達が行なっています。

保存地区に住んでいて、日ごろどのように感じていますか。

答 とくにありません。

飢肥における伝統的建造物群の保存事業の実施に当たって、他の地区をモデルにしたのでしょうか

答 保存したい地区をもつ団体の会議に参加して情報を交換しながら行ないました。

飢肥ならではの歴史的資源の活用はなんですか。

答 小村寿太郎の記念館を公開施設として活用しています。

記念館などの従業員はどのような人達ですか。学芸員ですか。地元の人ですか。

答 市が管理を委託している財団法人ですが、全員地元の人で身分が不安定な者が多いようです。

観光地にしたことのメリット、デメリットはなんですか。

答 デメリットは観光公害、ゴミ、勝手に敷地内に入るなどプライバシーの問題であり、メリットは知名度の上昇により住民の誇りが呼び起こされたことです。経済的には、年間13万人の観光客が来て、入場料などの売上が5000万円になりますが、経費と差し引くと黒字にはなりません。

飢肥は観光地としての維持・発展が可能だと思いますか。

答 観光客が来ても宿泊せず、いわゆる通過型で帰ってしまいます。飲食店や宿泊施設があまりないことなど問題があります。しかし、これしか生きる道がないという気持ちでいます。最近は自然志向なので、それに合せた展開が必要と考えます。

感 想

I アンケートについて

この感想は、現地調査参加学生のうち、重要伝統的建造物群保存地区担当班のリーダー吉田直樹が記述したものである。

いざ調査を始めると、家に人がいなかったり、怪しまれて調査に協力していただけなかったりと問題もあったが、だいたいの方はころよくご協力してくださった。また、アンケートを終えて帰ろうとする自分たちを呼び止めて積極的に飢肥の伝建地区についてのことや、なぜ自分がここに住むようになったのか等、話してくださったことがあり、直接住民の声を聞くことができないへん貴重なものとなった。

アンケートを終えてみて感じたことは、圧倒的に老人が多く、家から出て来た人や町の中を歩いている人のほとんどがお年よりだった。家は立派な伝統的建造物で、敷地面積が広く、家の周囲を石垣で囲んでいたのも、普段は見慣れない町並みを見ることができた。また、車庫や看板、電話ボックス等も周囲の景観に合わせて作っていたので、電柱や目だった建造物もなかったことから、町並みに全体的な統一感があった。

授業で事前に伝建地区を調べた際に、資料等で目にした建造物や町並みと違って実際にその場に足を運び、目にすることによって、建造物に利用されている木材や石垣・瓦などの質感、歩いてみて目にする町全体の風景などが新鮮なものだった。普段の生活には感じられない、昔の日本の町並みを歩いているような気分をふと思わせる雰囲気があった。

その昔のままで、町の姿を残そうと住民は思っているのだが、わが国の由緒ある城下町の多くは近代国家の成立、時代の変遷とともにその姿を変容し、長年にわたって保存蓄積された文化財さえ失われようとしている。

このような時代の中であって、今なお数多くの文化的史跡を残している城下町としての飢肥は大変貴重な存在といえる。そして、この貴重な自然と文化的遺産は、住民の誇りであり、これを正しく保存し後世に継承させることが最大の責務だと考えているところに、伝建地区に居住している人々や伝建地区を保存・修復するため活動している人々の意識の高さを感じられる。

そして、今後も飢肥の伝建地区の行方を見守り、また機会があったら飢肥に足を運んでみようと思う。

最後になりましたが、アンケートにご協力いただいた伝建地区の皆様や市役所の岡本さん、旧安藤家でお話してくださった安藤さん、梅村さん、松田さん、伊東さんに感謝の意を込めて、お礼申し上げます。

II 日南市について

この感想は、現地調査参加学生のうち、地誌・市政概要担当班のリーダー野島充が記述したものである。

日南市は確かに飢肥周辺などで高齢化、過疎化が進んでいるように見える。油津などの中心商店街でも空き店舗が目立っていたし人通りが少ない。中心商店街の空洞化はその街の新陳代謝性がなくなっているわけであり、都市の最重要地域が活力を失っている。しかし他の過疎に苦しむ町や村と比べるとどうであろうか。北海道などの炭鉱などが閉山し、産業がなくなり人口減少に歯止めがかからなくなった街などに比べれば日南市は王子製紙の大規模工場が立地し、観光にもまだ潜在能力が隠されているように思う。東九州自動車道開通の予定も将来に控えているわけであり、日南はまだこれから、という印象がある。

提言 飫肥重要伝統的建造物群保存地区について

この提言は、現地調査学生のうち重要伝統的建造物群保存地区担当班のリーダー吉田直樹が、担当班の調査に基づいて記述したものである。

観光客を宿泊させて、飫肥での観光をもっとしてほしいという住民の思いはわかるが、伝建地区と飫肥城周辺を合わせた地域の規模は小さく、一日で歩けるので宿泊の必要がないように思える。また、観光と保存地区の関係については、観光客を目的とした商売は保存地区の景観を損ねるということで、連携は必要だがその調和がいまひとつうまくいかないところにある。アンケート結果の問20でわかるように住民が民宿・宿泊施設の整備を望んでいるのならおもいきって、伝建地区を利用した民宿や宿泊施設を作れば、客を呼び寄せることができる。それによって、雇用も生まれると思うので、住民の高齢化により後継者がいないのなら若者を集めることができ、しかし、伝建地区は本来、伝統的建造物を保存するところであって、観光目当てではないということ、住民は心の中にとめておいてはいるはずである。その証拠に、道路・交通の整備と並んで同順2位の家屋等の保存修理が上位にあることから、住民はやはり、伝統的建造物を保存していきたいのだという気持ちが読み取れる。

したがって、通過型観光客の流れのままでも、周辺地域との相互協力による観光形態をとり、リピーターの客を増やすようにするとよいと思う。このことは、おび天の社長もいっておられたことだが、観光客にまた来たいと思わせるような魅力のある何かが必要で、それは、おいしい食べ物を食べた客はまた食べたいと思ひ、また来ようになるし、接客する際も、心からすることによって人の心をつかむことができる。また、他の地域にはない独自の発想も必要になってくる。

しかし、いくら通過型といってもバスや車で来た観光客に駐車場がなく、駐車場に止めたとしても、目的地まで遠く不便だと思わせてしまったら、観光客は離れていってしまうので、道路・交通の整備というのは、住民の意見を反映して行動するほうがよいと思う。

最後に、アンケート調査中に気になったことがあったが、トイレの設置場所が少なく、ある場所も明確でなかったので、自分を含め観光客もまた、皆不便だと感じていると思うので、その点も見直していくべきである。

日南市飫肥フィールドワーク参加者名簿

引率教員	千歳 壽一
ティ칭ングアシスタント	佐藤 光洋

地理学科3年生

地誌・市政概要担当

野島 充	石井 裕紀	切江 大地
------	-------	-------

重要伝統的建造物群保存地区担当

吉田 直樹	遠藤 克敏	大枝 拓
川上 巧真	村山 哲	

商人街担当

今井 祥太	蟻川 勝	鈴木 悠
三井 宏基	吉田 次郎	